

特集にあたって

大村 拓生

本誌の特集は、昨年四月に発足した「ひょうご歴史研究室」で設定された三テーマの一つである「赤松氏と山城」研究班での取り組みからうまれたものである。中世後期に播磨国などの守護となった赤松氏については、地元在住の故高坂好氏の研究（『赤松円心・則祐』吉川弘文館、一九七〇年・遺稿集『中世播磨と赤松氏』臨川書店、一九九一年）を嚆矢とする研究蓄積があり、『兵庫県史』および各市町村史でも史料の集成と事実の究明がすすめられてきた。また全国的にみても先駆的となる県下の城館に関する悉皆踏査報告書が刊行され（兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園調査』一九八二年）、赤松氏関連の白旗城跡（上郡町）・感状山城跡（相生市）・置塩城跡（姫路市夢前町）の三城郭が国指定史跡として、それぞれ大部の報告書が刊行されるなど、城館研究においても相当の蓄積がある。さらに文献・考古学・城館研究の成果を総合した『赤松氏と播磨の城館 報告集』（大手前大学史学研究所、二〇〇七年）のような試みもなされている。

その一方で、赤松氏関連の文献史料は膨大にあり、禅宗史料をはじめとして活用されていないものが少なからずあり、その全貌すら把握されるにいたっていない。そのため研究室の事業として関連史料の収集をすすめるとともに、平成二八年度から上郡町で実施される「赤松居館跡」の発掘調査とも連携していくこととし、研究班の方針を「三ヶ年を目途にして、上郡町が実施する『赤松館』の埋文調査と連携しつつ、それと並行して千種川流域を中心とする基本的な文献資料のデータ収集・整理にあたり、その調査・分析をすすめる」と定めた。したがって本特集はその中間報告的な性格を持つものである。

大村拓生・小林基伸「『赤松家播備作城記』―解説と翻刻―」は、城館研究の基本史料として用いられ、『兵庫県の地名』などでも利用される一方で、精確な翻刻がなかった『赤松家播備作城記』について、可能な限り原本の体裁を反映した全文翻刻を掲載するとともに、その史料的人格を明らかにした。大村拓生「揖保川流域の禅院と石見守護代所」は、建仁寺両足院蔵「本邦禅林宗派」に記された播磨の禅宗寺院について、関連史料からその立地と存在形態を検討するとともに、応永期に登場する石見守護代所の位置について新たな見解を示した。島田拓「上郡町域の赤松氏関連遺跡の調査成果」は、赤松氏研究者の間でも十分に周知されていない山野里宿遺跡・栖雲寺跡で実施された近年の発掘調査の成果がまとめられるとともに、本年度に実施された「赤松居館跡」試掘調査に関する現段階での所見が示されている。山上雅弘「兵庫県の国指定城館と保護について」は、前述した『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』の意義および山城中心の国指定化がすすんだ結果、平地居館への対応が遅れたとし、その遺跡としての評価と保護の重要性を提言したものである。何れも、今後の赤松氏と城館研究にとって重要な礎になるものと考えている。関係各位には、積極的なご意見・ご批判を賜れば幸いある。

また歴史遺産活用として、上郡町教育長三木一司氏に「『赤松』の御縁がつながる郷土学習」と題して小学校教育における取り組みについてご寄稿いただいた。次年度も上郡町と連携しながら研究班として引き続き活動を続けるとともに、町にも還元できるように取り組んでいきたい。なお巻頭でも触れられているように、兵庫県教育委員会は大手前大学と交流協定を締結し、「『赤松家播備作城記』―解説と翻刻―」はその成果である。さらに昨年一二月一七日には大手前大学史学研究所主催・ひょうご歴史研究室共催で「シンポジウム 赤松氏研究の新展開―権力確立の過程をさぐる―」が実施され、その内容が『大手前大学史学研究所紀要』に掲載される予定になっている。